「人にはどれだけの科学技術情報が必要か」に答えて

In Response to “Science Information and Basic Human Right”

石塚英弘

Hidehiro ISHIZUKA

月例懇話会担当常務理事

「人にはどれだけの科学技術情報が必要か」は、2007年3月に開催された月例懇話会の講師：横浜国立大学理事・中部大学特任教授の長島昭先生から聴衆と本学会会員に発せられた問い掛けの言葉である。

この講演は実に示唆に富んでいた。月例懇話会担当者で聴衆でもあった私は、その問い掛けを情報知識学に対する重要な課題と受け取った。本学会会員のために講演内容を長島先生に書いていただきたいと思ったが、多忙の先生には執筆に割く時間があるはずも無い。そこで、巻頭言を書くこの機会に、私が講演内容の概略をご紹介しますとともに私なりの考えも述べることにした。

長島先生の元々のご専門は物質の性質を測定して研究する分野（熱物性）であったが、測定で得られたデータや科学技術情報を扱う研究に展開し、現在は、データと情報に関する国際委員会 CODATA の日本代表である。その一方で、国立大学理事として大学経営にも参画した結果、今や科学技術情報から経営情報に至る広い視野に立って情報の重要性を認識されている。

まずは講演内容を紹介する。現在の社会では、貧富の差は拡大する一方であり、途上国と先進国の差も拡大しているが、その一因は情報の差にある。私たちが人間らしく生きていくには、最小限どれだけの科学技術情報が必要なのか。そのために私たちは何をすればよいのか。これが長島先生の問い掛け、問題提起である。Web 上などに大量の情報が在るから、それを調べればよいと考える方もいると思うが、本当にそう

なのか。大学理事会の会議でも大量の資料が配布される。大量に情報を提供すれば、それで良いと思っているのではないか。それらは全て必要なものなのか。必要な情報が提供されているのか。長島先生は、人間が人間らしく生きていくために必要な情報の例を、薬の情報、医学的情報、法律の情報、税金の情報、等々次々に挙げた。たとえば、全ての薬の情報ではなく、患者が本当に必要とする情報を得られるようになっているのだろうか、また、政府から提供されるべき情報がそれを必要としている人に提供されているかという訳である。

この問い掛けは重要かつ困難な課題であると私は思った。たとえば、単に或る薬の情報が得られればよいのではなく、治療すべき疾患に関する医学情報も必要であり、断片的な情報ではなく、それを理解するための知識も必要である。研究の進展によって情報や知識が変わることは少なくないから、断片的ないし断定的な情報を覚えていても役に立たず、その根拠となる情報や知識の枠組みを知っていることの方が重要である。これは教育の問題にも関連する。また、薬害エイズ事件の時には伝えられるべき情報が隠されていたことを思い出す。さらに、この講演の約3ヶ月後、誰のものか不明な年金保険料納付情報5千万件の存在が暴露された。正に示唆に富んだ講演である。長島先生の問い掛けを会員各位が受け止めてくださることを期待する次第である。